

日本経済新聞夕刊 連載

あすへの話題 第八回

## 魔法の土壁・踊る屋根

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

## 「あすへの話題」 第八回 / 魔法の土壁・踊る屋根

帰国するたびにため息がでる。田舎育ちのせいか、どうしてもコンクリートのジャングルに化けた日本の都会に馴染めない。

世界銀行の出張でも民家に泊まるのを好んだ。特に土の家が好きだった。冬は暖かく、夏は分厚い土壁の水分が蒸発して涼しい。壁の傾斜で家全体を通風筒にしたりもする。土に混ぜた牛の糞や藁草は虫よけ。サフランを殺菌用に混ぜた農家もあった。いつでもどこでも居心地が良かった。南アジアには、コンクリートより堅く耐震性も優れる「魔法の土壁」という技術があったそうだ。豪農の古い邸宅などが、その失われつつある英知を守り続けていた。

亜熱帯、英領バージン諸島の我が家も古い。18世紀頃に果樹園として栄えた地所で、農園主の家だった。奴隷解放で生計が崩れ、荒れ放題だったが、約百年前、インドで茶園を営んでいた移民の手で復元された。ユーカリやニームなど虫よけ用の大木が庭を守るように立つ姿に、果樹園の昔が偲ばれる。

裏山が西日を遮る台地に海を見下して立つこの家は、貿易風に向かって開いている。厚い石壁と下半分板戸の壁が地面に熱された風を妨げ、回廊が部屋に入る風を冷やし、それでも入る熱風は高い天井に逃げる。風の時にもそよ風が屋内を渡り、涼しい。

土地の人は「お宅は台風でも大丈夫」と言う。裏山の頂から家の左右を通り海へと抜ける2本の谷が、強風から家を守る風道だそうな。「踊る屋根」のことも教わった。継ぎ手は仕口の関節で人の腕のように曲がる2本の堅い熱帯樹。心細いが、突風に逆らわず、風を友に踊り跳ねる屋根らしい。

家屋を守る文明の英知。人の幸せと繋がるにつくづく思う。

## 著者紹介

西水 美恵子（ にしみず みえこ ）

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授（経済学）。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。  
個人メールアドレス [nishimizu@sophiabank.co.jp](mailto:nishimizu@sophiabank.co.jp)

本稿は、西水美恵子氏が、二〇〇六年八月十九日付の日本経済新聞夕刊に、寄稿したものです。

著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。